

色褪せないエピソード記憶の欠片たち

～心理学部発足20周年にあたって～

辻 敬一郎

2000年4月、学部創設と同時に専任教員として着任、在職6年間と大学院担当講師として5年にわたり、本学の教育研究に携わった。この間の出来事は今も色褪せることがない。学部創設20周年にあたり、このたび編集者から「エッセイ」執筆の依頼をいただいた。折角の機会なので当時の学部・大学院の様子を自分なりに振り返ってみよう。

学部設置の準備期 ～着任前のエピソード～

筆者が大学設置審議会心理学分科会の専門委員を務めていた時期のある日、勤務していた名古屋大学に森孝行教授（故人）が訪ねてこられ、そのとき本学心理学部の設置構想を初めて伺った。席上、先生からは、設置申請に係る懸案事項として、一学科単独と複数学科構成のいずれが望ましいか、新たに設ける専門領域を社会心理学系・発達心理学系のいずれにするのがよいか、この二点について筆者の見解を求められた。

そのときは、後に自分がお招きを受けるとは思いもしなかったので、第三者として率直な考えを申し上げた。すなわち、一学部に複数学科を置くとなれば単一の学問分野を過度に細分化することになり好ましくなからう、社会系か発達系かの二者択一ならば発達系を優先させるのがいいのではないかと、という内容だったと記憶する。後者については、社会学部に社会心理学専攻のスタッフが配置されていると聞いていたし、発達系は臨床系の主たる基礎領域と位置づけられるというのが、その理由だった。この意見が教授会や理事会においてどのように検討されたかは知る由もないが、当時の関係者のご尽力が実って無事に文学部の転換改組が認められ、現構成の心理学部が誕生した。

上にも述べたように、心理学部発足と同時に専任教員として着任するとは予想すらしていなかった。前任の名古屋大学には、学生・院生として9年、教官として36年の永きにわたって在籍したが、学部・学科の間に〈壁〉のない自由闊達な学風のなかで過ごすことができた。ただ、最後の数年間は学部長や副総長の立場で、カリキュラム大綱化・大学院重点化・国立大学法人化などの課題に対処するなか、自身の教育研究活動は二の次にせざるをえなかった。そこで、停年後は研究生活に専念したいと考え、進化生態学的世界的権威だったロザンヌ大学（スイス）生物学部のフォゲル教授（Professor Peter Vogel, 故人）との共同研究を計画、すでにその準備を進めていた。

その最中、秋も半ばを過ぎたある日、森教授、戸田正直教授（情報科学部、故人）が同席されるなか、梅村清弘理事長・総長（故人）から、学部創設に際し専任として着任するようお誘いを受けた。ご厚意に感激しつつも、突然のことにその場で即答ができず、暫く猶予をいただき熟考を重ねた末、就任を1年先延ばしにさせていただかないかと希望を申し上げた。

だが、学部設置要件に関わる人事ゆえ発足時の就任を変更できないと判り、一度はお断りしたのだった。その後、着任一年目の学務を年度当初と年度末に集中して行うこと、必要な場合は一時帰国して対応することを条件に、当初計画を大幅に縮小するかたちで在外研究を認めていただいた。理事会・教授会のご寛容は決して忘れられない。

手元に残る手帳を見ると、スイス滞在9か月の間に6回も一時帰国している。それでも、フォゲルさんとの熱のこもった議論、学生に戻ったような実験三昧の日々が貴重な〈充電期間〉となったし、ロザンヌ滞在を終えたのち2か月かけて北欧諸国を巡り心理学教育の実情にふれる機会を得たのも貴重な体験だった。

中京との旧き縁 ～心理学科のころ～

本学との縁は、着任した2000年から遡ること36年前、旧文学部に心理学科が設置され、最初の「初等実験実習」が開設された時点にまで遡る。初代学科長の結城錦一先生（故人）から、本務校教養部の助手だった筆者に、直々お電話で担当者の一人にお招きをいただいた。授業は、毎週土曜、4コマ通しで行われ、毎回レポート提出が課せられるという、学生諸君には大変な授業だったが、誰一人として脱落者がなかったのは嬉しい驚きだった。

授業担当は、専任の方たちのほか、東京から牧野達郎先生（早稲田大学教授、故人）が通ってこられ、そこに後藤倬男さん（名古屋大学文学部助手）と筆者が参加した。毎回、授業の最初に実験の背景的問題や実施手順について一通りの説明を終えると、学生諸君が作業に大わらわの間、私たちは控室で学問論や研究構想をめぐる議論に熱中した。この授業担当は最初5年間のみだったが、その後も特殊講義（「動物行動の諸問題」）や大学院演習（「行動発生論」）の非常勤講師として本学との縁が続いた。

全国初 ～アンビヴァレンツ～

本邦初の心理学部が発足すると、学会の役員会などでお会いする方たちからお祝いの言葉を頂戴した。それまで文学部・人文学部に学科・専攻として設置されていた「心理学」が学部で格上げされたのだから結構なことにはちがいない。だが、手放しには喜ばないという気持ちがあって、折角のご好意にもうまく応じられずにいた。

当時の状況に照らすと、いわゆる伝統校では既存の学部から独立しようとする動きは起きなかったし、専攻設置後の日が浅い大学の場合は実績不足で学部化の認可は得られそうになかった。その点、本学の場合、文学部心理学科38年間の教育研究実績が新部局設置に与って力となったと思われる。歴代の在職者のご貢献、法人本部のご支援なくしては実現をみなかったであろうことは言うまでもない。

その一方、筆者は常々、大学や学部は複数の異なる分野の構成体であることが望ましいと考えていた。特に、新しいミレニアムを迎えてパラダイム・シフトが求められるなか、「一分野一部局」型の組織改革や設置学部数をもって発展の証とする評価には同調できなかった。この想いは在職6年間、絶えず自分の脳裏にあった。当時、いくつかの大学から講演を依頼されるたび、この点を強調してきたし、その想いは今も変わることがない。

一本の電話 ～出勤初日の出来事～

本学教員として新しい年度が始まった日の朝のことである。前日に辞令交付があり、その日、初めて自分の研究室に入ったのは午前8時すぎだった。誰もまだ出勤していないキャンパス、部屋はガランとしていて落ち着かない。そんなとき電話のベルが鳴り響いた。当時、外線は交換室の取り次ぎで届いていた。受話器を取ると、交換手に続いて、「辻先生？」と元気な声、その主は心理学科時代の卒業生だった。筆者の就任を同期生から聞いたこと、自分が仕事で頑張っていることを話し終えると、「後輩たちの指導を頼みますよ」との言葉で電話が切れた。

このうえなく素晴らしい励ましである。再び静寂に戻った部屋で、新たな責務を感じて思わず胸が熱くなった。電話の声は、芽吹きはじめた樹々の緑とともに、あれから20年経つ今も鮮やかに甦る。

戸惑いと喜び ～ゼミ運営～

着任してまず感じたのは、学部生の多さである。初年度の入学定員はたしか170人だったが、留年者を含めると現員はその1.2倍くらいだったろうか。前任校の「教室」では、一学年10～15名の学部生を4名の教官で共同指導し、助手や大学院生もチュータとして役割を担ってくれていたから、何よりもその違いに圧倒された。いまひとつが「ゼミ」の運営である。ゼミでは、直接の指導が教員一人に委ねられるだけに、学生諸君との〈距離〉の取り方に戸惑いを感じた。

当時、毎年12月、2年次生を対象に「ゼミ説明会」が開催され、全教員によるゼミ紹介を参考に提出された希望にもとづき、調整のうえ配属を最終決定していた。1990年代後半から2000年代前半は「心の時代」とされ、空

前の「心理学ブーム」だった。心理学部設置もその〈追い風〉を受けていたが、ゼミ所属希望も臨床領域に偏り、筆者のゼミを第一志望とする学生は皆無だった。教員数と入学定員の比では、ゼミ当たりの学生数は10~11名になるのだが、平均化はとうてい期待できなかった。それでも、不本意配属の学生は、4—8—12—17—(20)名とはほぼ等差級数的に増えた。最後の年は1年後の退職が決まっていたため、20名の希望者のうち10名のみを受け入れた。

こうして、永年経験してきた共同指導から一転、自分独りでゼミを担当することになる。当初は確かに不安だった。ゼミ生諸君の選択する卒研テーマが多様なのは一緒に勉強すれば済むことなのだが、教員—学生関係には当初ずいぶん気を遣った。しかも、その時期、日本基礎心理学会と日本心理学会の代表者、日本学術会議の連携会員、大学審議会の分科会委員などの公務を併任していたし、心理職国資格化推進活動の責任者でもあった。そのため毎週のように東京に出張し、ゼミ生の相談に乗るには夜遅い時間帯や休日を割いていた。それでも、頼もしいことに、ゼミ生諸君が「自立と自律」をモットーにして自主的にゼミを盛り上げてくれ、その気風が年度を越えて継承された。ゼミを閉じるに際し学生諸君の手で作成された記念誌『M212』からはその様子が読み取れる。ちなみに、この冊子の表題は当時のゼミ室の部屋番号である。

ほかに、3年目からは「二編の卒論」活動を実践した。まずは3年次に全員で「プレ卒研」を企画実施し、その経験を踏まえて本番の卒研に取り組むという試みである。プレ卒研では、休暇を返上してデータ収集から結果の考察までを、時には合宿して進めた。そんな彼らの卒業後の進路は多様だが、それぞれの職域における活躍ぶりを心強く感じている。



卒論発表会を終えて。会には先輩ゼミ生も駆けつけてくれた



ゼミを総括した記念誌

文献講読のこと ～学部教育～

自分の不注意から同僚スタッフにご迷惑をかけた苦い出来事がある。その一つが「講読」授業の進め方だ。勤務2年目、初めて担当した「心理学講読演習」にテキストとして選んだのが、『意識とはなにか—科学の新たな挑戦—』（苧阪直行／著、岩波科学ライブラリー選書、1996）である。

この授業に関しては、多様な問題関心をもつ学生に共通する知的素養を培うことを第一義とし、テキスト選定に関しては日本語の著書を採用すると決めていた。ところが、その準備を済ませた後、『履修の手引』に「外書をテキストとする」と説明があることに気づく。すでにテキストの発注や授業の進行計画も済ませていた。やむなく教授会で不注意を詫び、例外を認めていただくことになった。

筆者が外書講読であることを見過ごしていたのに弁解の余地はない。しかし、心理学部の場合、英語学力は入学選抜に際して必須条件とされていない。入学後の学修に必要な学力を具えているか否かを試す入学試験に英語を課していないならば、必修の講読授業にもそのことが考慮されて然るべきではないか。この一件があって、その後「外書」の〈縛り〉は解かれることになった。

こうして、以後5年、毎年度テキストを新しく選定し、読解力増進を目的に毎週レポート提出を課したが、履修者は最後には書評を書くまでに力を伸ばした。ちなみに、本学在職中の学部教育に関わる論考は以下の拙論*とし

て紀要に発表しているので、ささやかな教育実践例としてご一読いただけると幸いです。

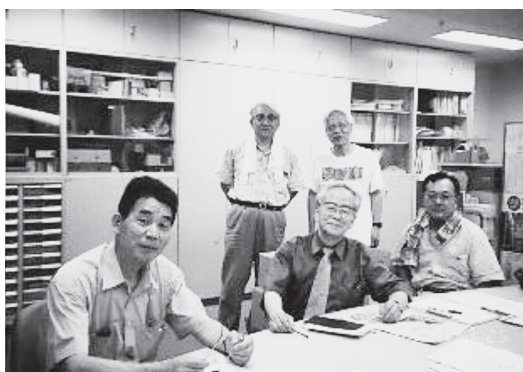
* (1) 学部1・2年次「心理学講読演習」の内容充実の試みとその成果. 心理学部紀要, 2, 1-22.

* (2) 学部における心理学教育の諸問題. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 3 (2), 53-58.

ゼミ室通り ～学部エリアの整備～

学部発足を機に行われたのが、部屋の改装と配置換えである。学部教授会で選ばれた整備委員は5名、筆者を含めて4名が新任者だったから、過去の経緯や既得権に頓着せず、学部エリアを再点検して整備を断行した。例えば、ゼミ室は固定せず当該年度のゼミ生数に応じて指定する、ゼミ室は2・3階に集結してゼミ間の相互交流を容易にする、実験室・観察室・計算機室は学部共通とする、最上階のスペースを研修室として招待講演や学部行事に活用するなどが、主な改変点である。他に、2・3階の廊下部分を卒論・修論などのポスター発表に使用可能なスペースとした。この方針については、ちょっとした〈バトル〉はあったものの、どうにか円く収まった。

ゼミ室が学部生・大学院生のワークショップ（作業場）として配置されているのは、私立大学ではめずらしい。欧米の大学でも、学生・院生はふつう図書館学習室を利用している。本学では従来どおりゼミ室を維持したい、それが教授会の一致した思いだった。



大改装の役目を終えた整備委員の面々



大学院修了記念パーティ

大学院に吹く風 ～研究科の教育方針～

新たなミレニアムを控えた1998年、大学審議会は「21世紀の大学像と今後の改革方策について」を答申し、大学院における教育研究の高度化・多様化を掲げ、大学院教育の複線化を提言した。それにより、旧来の学術研究者育成に加えて専門実務者養成をもめざす組織への拡充が推奨された。平成の教育改革の一つ、〈役に立つ人材〉を求める社会的要請に応える文教政策の眼目だった。

とはいえ、人文科学や自然科学の諸分野にこの方策に従う動きはほとんどなかったし、農学・工学・医学などの分野では殊更に目新しいことでもなかった。だから、「心の問題」という追い風に力を得てこの方針に乗った心理学分野の大学院（修士課程）の設置ラッシュは他分野には奇異にすら映った。幸いにも本学の場合は現組織を変更することなくて済んだが、専門実務者養成を目的に掲げた研究科（あるいは専攻）で、資格認定の条件に照らして教員配置やカリキュラム編成に修正を迫られる例もあったと聞く。

また、博士課程では、学位授与の在り方が変化した。学位はもはや学術貢献に対する「称号」ではなく、「免許」の一つとみなされるようになった。旧来の「〇〇博士」が「博士（〇〇）」に改称されたのも、その間の事情を示している。もっとも、この大学院改革にもかかわらず、教育現場では旧来型の指導が根強く残っていた。徒弟的指導スタイルと共通教育軽視がそれである。

ところで、本学の場合、2004年4月の心理学部発足の僅か2年後、完成年度を待たずに大学院心理学研究科の設置が、しかも修士課程・博士課程同時に認可された。文学研究科の転換改組という事情もあったが、文教政策の大学院改革におけるモデルという意味合いがあったのではなからうか。

「心理学論」～研究科共通教育～

研究科の初代科長に就くことになり、大学院教育の眼目としたのが、カリキュラム構成である。前期課程（修士課程）においては、開設科目を研究科共通・専攻共通・領域別の3種とし、基本的には前二者を必修、領域別は必修・選択の両者を含むようにした。このうち研究科共通科目は、「学論」（学史を含む）と「研究法」（方法論）の学識を深めるよう設定したものである。新たなパラダイム・シフトが求められるなか、狭い専攻に閉じこもっている、学術的・社会的要請に対応できないどころか、追い風が忽ちにして向きを変えかねない。研究科教育では、高等教育におけるリベラル・アーツの軽視が進むなか、異分野交流・学際協力で役立つ人材の育成を重視した。

有体に言えば、研究科共通科目に対する研究科委員会の反応は当初、必ずしも積極的ではなかった。しかし、設置審査にあたった委員の方たちからは、申請書に掲げたカリキュラム編成、とりわけ研究科共通科目につき、新しい大学院教育の理念に合致したものとして高い評価をいただいた。同じ趣旨で、後期課程（博士課程）においては、「研究法演習」を共通科目とし、各専門領域を異にする院生同士で各自の課題研究について助言しあえる場を設けた。これも、領域を超えた連携を活性化したいという想いに発したものにほかならない。

このような経緯で、研究科設置当初から、共通科目の担当を自ら志願した。幸い、年度が進むに伴い、関心をもつ受講者が増え、専攻領域を超えた相互交流も盛んになった。振り返ると、試行段階から退職後の非常勤まで十年余、この授業を担当したことになる。なお、この間の経緯については、次の拙稿*をご参照いただきたい。

* (1) 大学院博士前期課程の心理学教育に関する論考. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 3 (1), 27-37.

勇み足 ～COE 形成計画～

心理学研究科として早々に取り組んだことの一つにCOEへの応募がある。COE (Center of Excellence) は、学術審議会答申を承けて文部科学省が打ち出した21世紀の学術研究推進事業の一つである。国立大学に対しては、研究経費を講座に一律配分する従来方式を一部改め、高度の学術拠点の形成に資金を重点的に投入しようという方針で始まり、公立私立大学に対する助成に関しても同様の支援体制を導入したのである。

この事業に申請すべく、研究科委員会に諮って各領域1名の委員から成るワーキング・グループを構成、筆者が統括責任者となって構想の策定に当たった。それが「平成14年度COEプログラム拠点形成計画調査」として提出した「心理技術開発・移転推進の拠点構築」である。助手を含む教員全員が名を連ね、5年間、約6億6千万円の予算規模で、基礎研究を踏まえた心理技術の開発と国際協力の推進をめざすという内容だった。本学としてCOE申請は初めてのことであり、当時の小川英次学長（故人）はじめ事務局の方たちに多大のご支援をいただいた。

しかし、結果は、予想どおり(?)、不採択だった。「構想はそれなりに評価できるが、現有スタッフだけでは実施が困難」というのが審査所見である。研究科発足早々この事業に手を挙げたことについては無謀の誹りを免れないうが、研究科の新たな出発にあたっての意気込みを示しえたことはそれなりに貴重だった。

むすびに

退職は、定年まで1年を残す2006年3月である。依願退職は1年前、教授会に申し出て認めていただいたのだが、その理由は単純である。生死は言うに及ばず入学・卒業も〈定め〉に従うしかない。人生においてせめて一度くらい引き際を自分の意思で決めたいと、そう思ったまでのことである。当初は時間割のない生活に戸惑い、投影法検査の被検者さながらに〈自由のしんどさ〉を味わうことになったが、数か月もすれば落ち着き、あれから15年になろうという現在、自由業もすっかり板に付いた。

こうして往時を振り返ると、他にもあれこれ止めどなく当時の記憶の欠片たちが立ち現われ、そのたびに本学在職中の充実した日々を再体験できる幸せを感じる。

結びに、本学の一層の発展を祈念し、心理学部・心理学研究科の更なる飛躍に期待して筆を擱く。

(元中京大学教授)